〔特別展　元時代の絵画―モンゴル世界帝国の一世紀―によせて〕

# 龔開筆「駿骨図巻」（大阪市立美術館蔵）について

老い衰えて骨と皮だけになった馬が画巻の進行方向に沿って歩むように描かれています。画家自身による伯楽撰『相馬経』の引用によれば、浮き出た15本の肋骨はかつて一日千里を走る駿馬であったことを示しています。濃墨を用いた強固な輪郭線は、後世の補筆も認められますが、その筆使いは粗くやや単調でさえあります。

画家の名は龔開（1222～1307？）、字は聖与（予）、号は翠巖。江蘇省淮陰の人。南宋末期には両淮設置司監当官でしたが、宋朝滅亡後は仕官せずに売絵で生活していました。本図の後方には自詩が特徴的な隷書体で書されています。

「一たび雲霧が天関に降りてより
　空に尽きる先朝の十二関
　今日誰か駿骨を憐む有らん
　夕陽の沙岸に影は山の如し」

元・湯垕『画鑑』によれば、この詩は盛唐詩の趣があるとされ、当時から人口に膾炙し、非常に有名でした。この七言絶句によって、この馬がかつて宋朝の天子の廐にいたが、宋滅亡後に乗り捨てられ、老残の身をさらしている老いた駿馬の姿であることがわかります。又、本図中の跋でも指摘されていますが、この痩馬の姿は盛唐の大詩人杜甫（712～770）の詩「痩馬行」を想起させます。この詩は杜甫が長安の東の郊外の一頭の痩馬を見て作ったもので、華州に左遷された自分の境遇を詠じたものとされています。画家も当然この詩を念頭においていると考えられます。この図巻は宋朝を懐かしみ元朝をのろう有節の志を表したものとされ、元朝に抵抗する遺民意識の表象と見なされたことが、後に続く名だたる文人たちの跋によっても知られます。

龔開は宋朝に殉じた陸秀夫（1236～1279）と文天祥（1236～1282）の伝記をなし、「駿骨図」の他にも鬼を従えた鍾馗とその妹の行列を描く「中山出遊図巻」（フリーア・ギャラリー蔵）などを遺しています。しかし、元朝に対する抵抗の精神を堅持し続けた鄭思肖（1241～1318）とは異なり、元朝に仕えた趙孟頫（1254～1322）らとの交流も認められます。二朝に仕えることを罪悪視する「弐臣」の思想自体、当時はそれほど意識されておらず、むしろ、龔開の創作活動も官途に背を向けた多くの江南の知識人の需要に支えられたもので、元初の時代意識の反映したものと考えられます。

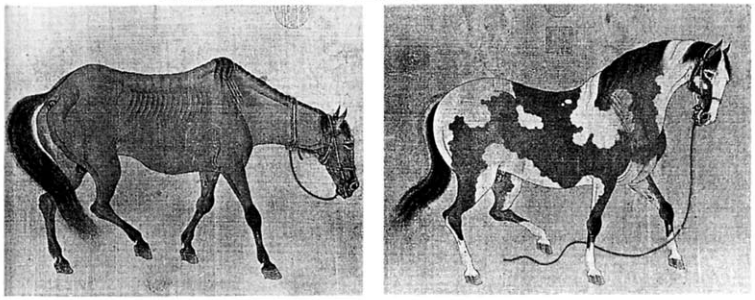
本図を反転させたような、うなだれたポーズをとる15肋の痩馬が元・任仁発（1255～1327）「二馬図巻」（北京故宮博物院蔵）中にも見出せます。この図巻の自題によれば、2馬共に仕官した者の姿を象徴しており、肥馬が顕官を、痩馬が廉官を表しています。中国では馬は非常に古くから造形の対象であり、動く四肢をいかにバランスよく配置するか、馬の立体感や筋肉の動感をいかに筆線に還元し表現するかなどがその課題でした。こうした画馬の伝統からすれば、この肥馬と痩馬の対比にもより造形的な意味合いが含まれています。

杜甫が画馬の名手曹霸に送った詩「丹青引」には「弟子韓幹早く室に入り、亦た能く馬を画いて殊相を窮む。幹はただ肉を画いて骨を画かず、忍くも驊騮をして気凋喪せしむ」とあります。その中でも「幹惟画肉不画骨」の句をめぐって様々な解釈がなされました。例えば、唐・張彦遠『歴代名画記』は、韓幹の画く馬が肥大であるから杜甫が非難したとして、韓幹を擁護しています。「照夜白図巻」（メトロポリタン美術館蔵）の評価からしても画馬の歴史における韓幹の存在は、むしろ、揺るぎないものです。にもかかわらず、龔開は自ら画馬を韓幹ではなくその師曹霸に学んだと記しています。この痩馬の姿は曹霸の画馬とはかけ離れたものでしょうが、杜甫の「痩馬行」を意識しつつ痩馬を画いた龔開が、同じ杜甫の「丹青引」の見解に依拠したとも考えられましょう。馬の肥・痩を肉・骨と対応させる考え方が賈思勰撰『斉民要術』巻6に見られます。龔開自身も述べているように、痩馬は肉中の骨を画くことができます。肥馬を画くことが「画肉」であるとすれば、痩馬を画くことが「画骨」になるという解釈が成立し、「曹霸―画骨―痩馬」「韓幹―画肉―肥馬」がそれぞれ対応しているわけです。龔開画には痩馬のみが画かれておりますが、その痩馬の姿に肥馬の存在を補って考えることで、龔開の意図はより明確になります。

任仁発「二馬図巻」は唐時代以来の画馬の伝統に忠実に則った着色画の表現です。これに対して、龔開「駿骨図巻」のそれは濃墨を多用した強固な輪郭線を持ち、強烈な存在感を表出しています。遺民意識という眼鏡で見れば凄絶な印象さえ感じられたこの痩馬の姿ですが、それは同じ龔開の「中山出遊図巻」中の悪鬼たちにおける濃墨を多用した戯画的な表現に通じるものです。つまり、明末の李日華によっても指摘されるように、図様が左右反転の関係にある両者の表現には大きな隔たりが認められますが、それは、むしろ、龔開画の革新性を浮き彫りにしています。そして、任仁発「二馬図巻」中の痩馬の図様は龔開の痩馬の形態を忠実に継承しており、龔開画のイメージが当時いかに強烈なものであったかを示していると考えられます。　（板倉聖哲）

駿骨図巻（部分）　龔開筆　大阪市立美術館

二馬図巻（部分）　任仁発筆　北京故宮博物院



季刊 美のたより No.124
平成10年8月27日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.